

学力調査結果の分析や考察

□学力調査結果概況

◎小学校

- 全国と比べて国語Aと算数Aはほぼ同様であるが、国語Bと算数Bは下回っています。
- 全道と比べて国語Aと算数Aはほぼ同様に上回っていますが、国語Bと算数Bはほぼ同様に下回っています。
- 領域別に（国語8領域・算数8領域の16領域）全国と比べると、国語Aの伝統的な言語文化（ことわざなど）と算数Aの量と測定は同様に上回っていますが、他は下回っています。低い・相当低い領域が7領域あり知識・技能の定着や活用する力を身につけさせる必要があります。
- 領域別に全道と比べると、国語Aの伝統的な言語文化、国語Bの話すこと・聞くこと、算数Aの数と計算、量と測定、算数Bの量と測定は同様からやや高い範囲で上回っていますが、他は下回っています。全体的にはほぼ同様から同様の領域が多いです。
- 特に国語Bの書くこと（まとめて文章化したり自分の意見を書くなど）の領域は、全国と26.7ポイント（正答率は-9.2）、全道と15.9ポイント（正答率は-5.5）落ち込んでいて、今後の大きな課題であり指導の工夫を要します。
- 平成25年度と比べると、同様に全道平均を維持しています。

◎中学校

- 全国・全道と比べて全教科でやや低いから相当低い範囲で下回っています。
- 領域別に（国語7領域・数学8領域の15領域）全国・全道と比べると、全領域でやや低いから相当低い範囲で下回っています。低い・相当低い領域が13領域あり知識・技能の定着や活用する力を、身につけさせる必要があります。
- 特に国語Bの書くこと、数学A Bの資料の活用、数学Bの数と式は、15.4ポイント（正答率は全国と-10.4全道と-8.6）から24.1ポイント（全国：-9.9全道-8.1）の範囲で落ち込んでいて、今後の大きな課題であり指導の工夫を要します。
- 平成25年度と比べると、全道平均より全般的に低下しています。

□全教科や教科全体領域のチャート図

- 全国を100としたときの、全道と七飯町の結果の比較です。一目でその特長がつかめます（七飯町の数値は、七飯町各領域の平均正答率÷全国平均正答率×100で算出しています。点数や正答率の差ではありません）
- 小学校はほぼ全道レベルであることと、中学校は全体的にやや低いことがわかります。
- 領域的には、小学校の国語B（書くこと）と中学校の4領域が落ち込み、学習上の課題と考えられます。

□七飯町の平均正答率の推移

- 母集団の数の差もありますが、年度ごとの振幅が激しいです。
- 問題の難易度や対象児童生徒の状況などにより、単純には比較できませんが、

経年による明確な向上や低下は判断できません。しかし、振幅をくりかえしながらも19年と比べると、少しずつ向上している様子がうかがえます。

- 特に小学校は全教科で、22年度の向上、24年度の低下に大きな特長があります。中学校は小学校ほどではありませんが、21年度の低下、22年度の向上に特長があります。
- 上記特長のある年度の、学校や家庭の状況、学級や学級経営の状況、児童生徒の状況などを追跡調査してみると、それぞれの因果関係や学力向上の指導のポイントや方策が浮かび上がってくる可能性があります。

□七飯町の正答数の状況（下位層の割合）

- 下位層の児童生徒の学力の向上は、教育の喫緊の課題であり、教師の重要な使命といえます。
- 26年度調査結果では、小学校の下位層の割合は、国語A以外は全道・全国と同様からやや高い傾向にあります。中学校では、ほぼ同様から相当高い教科が多いです。
- 過去3年間の全国との差をみると、小学校国語では着実に縮小し、算数では26年度で拡大しているが、全体的には縮小の傾向にあります。中学校国語では縮小傾向にありますが、数学では拡大の傾向にあります。
- 七飯町全校とも下位層の指導には様々な工夫をしていますが、今後とも下位層の状況を分析し、各校の現状に見合った校内指導体制の工夫が求められます。併せて、行政による人的・物的な支援、家庭・保護者の支援と学校との連携は、欠かせない方策となります。